

なのはな通信

No.34 2024.3



沖縄研修旅行

『「患者さんの人生や病態、社会について納得のいくまで学んだ。」「漠然としていたものがはっきりしたような気がした」「患者、家族の立場に立って考えることが自分の看護観を発展させることができるのだと学んだ。看護師への決意と覚悟ができた。」「諦めないで患者さんの生命活動を発揮させることができるよう患者さんと共に回復の可能性を追求し続けたいと心に決めた。」「私たちはいつでもどこでも安心できる無差別平等の医療者を目指し、国民の人権擁護の立場に立ち人間の命を守るとして今後も学び続けていく。』

卒論発表で述べられた3年生のレポートの一部です。

学生は、学校での学びと臨地実習で、必死に生き抜こうとする人間の力強さ、人間の回復力のすばらしさを実感し、社会や平和と人権そして医療者の役割にもしっかり目を向け、人としての成長も遂げています。三年間の学びの集大成であるこの機会は学生の大きな成長を実感する時でもあります。こういった学生の学びを支えているのは、民主的で経験豊かな多くの教育実践者の方々への惜しみない応援や民医連の事業所が地域住民の皆さんと共に歩んだ医療活動の歴史と実践が学生たちに豊かなフィールドとして提供され、教育力として学生の成長に大きな役割を果たしているからであることを改めて痛感します。

まさに本校の財産です。心から感謝申し上げます。

新型コロナウイルス感染症の政府対応は5類へ変更になりました。感染者として報告される人数は去年夏の第7波を超えてはいませんが、全数把握は完全には行われておらず、実際にはすでに第7波のピークを超える過去最大の感染となっていて死者数も過去最多となっているだろうといわれています。

看護学校として、今後も感染状況の注視を怠らず感染対策は引き続き求められます。授業や臨地実習など少なからず影響を受けることが予想されますが、大切なことは、教職員、学生がそれぞれ知恵をしばり、創造的に一つ一つ行動していくことです。

私たち教職員は、この新型コロナウイルス感染症を乗り越え、学生の学びを保障していくこと、特に学習内容を維持していけるカリキュラム編成の実施や臨地実習や講師の方々との共同・連携の強化をはかっていき、学生の豊かな学校生活のための学びの機会を最大限保障できるよう努力していききたいと思います。



校長 窪倉 みさ江

学生と 共に歩んだ一年

1年生

29期生

担任

戸澤亜矢
井藤美和
治田美穂
中川千和子



29回 ナーシングセレモニー

4月、入学してすぐ「地域の
人々の生の声を聞き、人生・健
康・医療について学び、保健・
医療に対する要求を捉え、看護
について考える」目的で地域交
流研修を行いました。80歳代
のB氏が物心ついたときには
日本は戦争状態にありました。
広島原爆投下時、爆心地から
20km離れたところに住んで
いたため、原爆が広島市に落ち
た内情を知りませんでした。し
かし、ピカドンという噂や黒い
雨、被爆された方々の事を今で
も覚えていました。戦後は戦災
孤児や貧困、労働環境など戦争
による影響が社会全体にあった

とも教えていただきました。私
たちはこれまで戦争とは爆弾が
落ちてきたり、町が破壊される
ことで住む場所や食べ物がなく
なるなどの被害ばかり考えてい
ました。しかしB氏のお話で、
戦争は人間の尊厳を奪うのだと
思いました。B氏は「平和
への願いは自由」と
語り、それが平和活動
を続ける理由と話され
ました。今の日本政府
は憲法改定を進めよう
としており、そのよう
な現状に危機感を持っ
て平和活動をしている
と話されていました

全国各地で九条の会の平和活動
をしている方々が憲法改定を阻
止している事実や、大きな政治
の力よりも市民一人一人が平和
に希望をもち、諦めず伝えてい
くことがどのようなことよりも
強いと教えていただきました。



楽しかった歓迎会



交流研修発表



先輩とも仲良くなりました

9月、初めての基礎看護学1実習がありました。90歳代のG氏は都内のアパートで独居生活をされていました。9月上旬、クーラーのない自宅でぐったりとしているところを訪問診療医の勧めで入院されました。中学校卒業後は、定時制高校に通いながら働き始め様々な職に就きました。65歳の時に勤めていた運送会社が倒産、70歳で前立腺がんを発症しそれまでの貯金が底をつき生活保護を受け始めました。G氏の住んでいたアパートはトイレが共同でお風呂もありませんでした。そのため家から10分程度の場所にある銭湯に坂をのぼって行っていました。しかし、身体が動きにくくなり半年もの間入浴できず、伸びた爪を使い体の垢を取っていたそうです。また夏の暑い日はパンツ一枚で外に出て風にあたり体を涼めていたこと、冬はガスストーブも使用できなかったこと、冷蔵庫も壊れ冷凍庫のみを使用し生活していたことを話してくださいました。入院前は1週間以上食事が食べられず、家にあったのは区から支

給されたビスケットのみでした。G氏は、「倒れた時迷惑をかけるから救急車を呼ぶことをためらった。このまま死んでしまうのかなと思った。」と話していました。私たちは、そのような環境で今年の暑い夏をクーラーもない中で生きていたことが信じられず、とても苦しかったです。G氏には「施設での生活は考えていない。家に帰りたい。あと何年生きられるかわからないから、戻れるときに帰りたい。入浴したい。」という願いがありました。理由は、長年住んでいる地域で住み慣れている家、使い慣れているお店や会話を交わす人たちがいるからでした。実習4日目、体調が悪くてもG氏は歩行練習を希望しリハビリを頑張っていました。それは、「早く歩けるようになって家に帰りたい」という願いがあるからだと思いました。そして、G氏の願いは治療を頑張る理由だと思い諦めない姿に逞しさを感じました。G氏が家に帰るには冷暖房設備や、栄養のある食事、入浴できることが必要でした。しかし、

G氏の住む区では生活保護世帯でクーラーをつけることはできないと知りました。私たちはこの話を聴き、体調が悪くなった原因が環境にあったにもかかわらず、このような環境にそのまま戻ることはあってはならないことだと考えました。全ての人が最低限の生活を送る権利が保障される社会はどうあるべきか学んでいく必要があると思いました。

入学してから平和や人権、社会環境について真剣に考えました。基礎看護学1実習では患者さんのありのままを捉え患者さんの願いを応援すること、患者さんの願いの実現のためには人権や平和についても学び、政治に関心を持ち、自分の考えを示すこと、参加することが大切と学びました。

医療、看護は平和であるからこそ成り立つものであると知った私たちは、目の前の患者さんの人権を護るため日本国憲法を学び、平和を大切にする看護師を仲間とともに目指します。

学生と2年生 共に歩んだ一年

28期生

担任

臼倉智美
生田知歩
飯島時子
左部祥子
高田澄子



稲刈りに全員集合

新型コロナウイルス感染症第8波の影響で基礎Ⅱ実習が3月となり、2年生になってすぐに1人1人が発表するゼミナールを行いました。40歳で夫が他界し駄菓子屋で生計を立てながら息子を大学まで進学させた患者さんは、脊柱管狭窄症があり、2回目の腰椎圧迫骨折で入院していました。痛みから日常生活が制限されるなか、「駄菓子屋をやっていた時が1番幸せ」と語る姿に、仕事は患者さんにとって生きがいであり、誇りなのだと学んでいました。言葉数が少なく、表情もあまりでない方でしたが、困っている時

はまばたきが多くなること、体調によって言葉数も変わってことを緻密な観察の中から掴んでいました。

5月末の田植えでは、全員で1列になり手で苗を植えていました。泥の中では思うように動けず、まっすぐに稲を植えるのも簡単ではない作業でしたが、大変さも楽しさも感じながら行っていました。田んぼの中のカエルやアメ

ンボも見つけ、小さな生き物も稲を育んでいるのを感じていました。小さな苗からお米ができ、その栄養が生きるエネルギーに繋がっているのだと思うと、生命は繋がっているのだと



生命活動 田植え



生命活動 田植え 苗を植えるのは意外と難しい



生命活動 稲刈り

学んでいました。夏休み最後の日には稲刈りもさせていただきました。小さかった稲が大きく成長していることに感動し、稲も人と同じように生命活動を営んでいて、お米の成分は人と同じ要素で成り立っていることに驚いていました。私達が行ったことはほんの一部で、お米作りの大変さも実感し、食べ物の大切さを改めて感じていました。

成人Ⅰ実習では、介護の不十分さから脱水で入院された患者さんを受け持ちました。認知症を発症され、亡くなった夫と過ごしていたことや美容師の話を繰り返しされていました。短期記憶は失われてしまうかもしれませんが、楽しかったり嬉しかったりする記憶は残っていくのだと分かりました。そして、患者さんの思いや行動を否定せずに接することで不穏症状が安定し、患者さんらしく過ごせることを学んでいました。また、抑制されている患者さんの姿から、患者さんの尊厳がまもられているのかと問題意識を持

ち、抑制のない、自由を保障する看護を目指したいと発表していました。100歳代の患者さんは、コロナウイルスに感染後、十分に回復できないまま脱水を引き起こし入院した方でした。日々の会話の中で、ご自身の戦争体験を話されることが多く、いつでも自害ができるように白装束と切腹用のナイフを持ち歩いていたと教えてくれました。「戦争は残酷だからやめるべき。平和を考えたらやるべきではなかった」と伝えられ、看護は平和の上に成り立つものであり、改めて戦争は看護と対極の存在であると学んでいました。私達に伝え残す言葉は、私達が思う以上に貴重で継いでいかなければならないと感じ、戦争のない世界をつくることも私たちの役割であると学んでいました。

老年看護学実習では、脳出血後に半身麻痺と失語症を患った方を受け持ちました。長距離ドライバーという労働が脳出血の原因であると捉え、生活と労働の背景が疾病を引き起こすこと

を学んでいました。思いが伝わらない辛さや先の見えない不安がありながら、リハビリを頑張り症状が改善していく姿から人間の回復力の凄さを学び、患者さんの隣で一緒に頑張ることが看護師の役割であると学んでいました。在宅看護学実習では、熱布バックケアや口腔体操の実践で、歌うことが好きな患者さんと2年ぶりに一緒に歌を歌うことができました。また、在宅酸素を使用していて、外に出られなくなっていた患者さんからは、住み慣れた地域で病気と一緒に生活するおもいを教えてもらいました。外に出ずに何ができるかを考え、以前散歩していたコースを学生達が歩いて動画撮影し、一緒に見てもらうと、妻と楽しそうに会話され、笑顔が見られました。看護技術は、その人らしく生きていけるよう応援することと学んでいました。

病棟や在宅でたくさんの患者さんと出会い、学び、日々成長し続けています。

学生と 3年生 共に歩んだ一年

27期生

担任

富田智恵

大井 涼

瀧本美陽



体育祭で一致団結

総合実習～基本的な人権擁護の 立場に立つ看護～

食道癌で入院した70歳代男性B氏は知的障害があり障害者グループホームで生活されていた。余後数か月と考えられ、治療は望まず苦痛を緩和する方針となった。好きなマグロを三崎まで食べに行っていたことや、退院したらグループホームに帰って歌いたいと話していたが、医療的ケアや看取りができず、帰れないという現状があった。なぜ帰れないのかという疑問から『地域での生活は護られているのか』をテーマに調べていった。政策では、地域包括ケアシステムの名で「可能な限り住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けるこ

とができるための支援・サービス提供体制」と掲げられていた。しかし、年金は生活するには少なく、高齢者の貧困問題、医療・介護・福祉の自己負担の増額などの事実を知った。障害者グループホームでは、施設への補助金不足による経営難や、給料の少なさから人手不足が深刻化し、医療者の配置困難から、最期までグループホームで生活することが難しかった。私たちは、自分らしい生活や健康に生きることは憲法で護られる権利であると考えた。しかし、その権利は護られていなかった。

この学校に入学し、病気や人体のことだけを学ぶと思っていた。戦争や憲法の話を知ったとき、看護に関係ない、自分に関

係ないと他人事であった。しかし、学んでいくうちに実習で患者さんの置かれている現状を知り、もっと安心して誰もが願う生活ができるようになってほしいと思うようになった。聞き飽きていた憲法が、私達人間が生きていくために大切なことだとは思っている。3年間の学びで、社会にある問題や人権についてこれまでになかった視野で物事をみることができるようになった。実習では、人間が生きていくこと、自由や幸せとは何かとずっと考え続けていた。日本国憲法で護られるべき私たちの人権が保障されていない事実を知り、どのようにしたら変わるのだろうかと考えた。この先、本当に人権の護られる社会を実現できるのか

迷うこともあると思う。1 人の人間として、看護師として、その人らしい生活をまもっていききたい。同じ志を持った人たちが繋がりあい、小さくても集まればいつかは大きくなっていくと信じて突き進んでいきたい。

研修旅行

私たちは事前学習を通して、沖縄が日本で唯一地上戦が行われ住民も多く参加し、たくさんの命が奪われていた事実を知りました。そして、実際に現地に行くことで学びを深めたいと思い、沖縄へ研修旅行に行きました。沖縄といえば自然豊かで綺麗な海が印象的でした。しかし現地へ行き、戦時中実際に使用されたガマを見学すると中は懐中電灯をつけていないと真っ暗でした。こんな場所で何年も過ごしていた方もいたということを知り、驚きました。また、天井などには銃弾の跡も残っており戦争が本当にここで起きていたことを実感し胸が苦しくなりました。

研修旅行の中で特に印象に残ったのは謝花さんからのお話でした。謝花さんは戦争体験者であり、伊江島の「わびあいの里」にて戦争の悲惨さについて語り続けている人でした。伊江島はすごく小さな島ですがここでの戦闘は沖縄戦の縮図とも言われており、軍人だけではなく多くの住民が犠牲となった戦場でした。話の中で「戦争は地震や津波とは違い、人が起こしたものであり人災。人が起こしたもののだから人が止められる。」「戦争をなくさなければならない、戦争はこの世にあってはならない。幸せになるためには平和でなければならない。命あっての幸せ。どう生きればいいのか考えていく。」「自分たちの税金が何に使われているのか、政治に関心を持ち、学び、知る



沖縄戦の実相を学ぶ



船で観光

努力をしてほしい。」と熱く伝えてくださいました。実際に戦争を経験された謝花さんの言葉は重く心に残り、発言することでも学ぶことも知ることも許されている時代だからこそ、二度と戦争を起こさせないために学んでいく必要があると思いました。

ひめゆり資料館へ行き、人を救うための看護のはずが、毒薬を渡し自決を強要するような状況に加担せざるを得ない過去があったことを知り、そのような状況になってしまう戦争は2度と起こしてはいけなく強く思うとともに、平和であるからこそ医療は成り立つものであると今回改めて実感しました。私たちは医療者になる者としてそのような過去があったということと終わらせず、事実を受け継ぎ周りの人に伝えることの大切さと、戦争は人権とは相反するものであることを学びました。

現地のガイドの方から「戦争の遺跡は残っていても場所や意味がわからなければ忘れ去られ

てしまう」と教えていただき、戦争の事実を知りできる限り多くの人に伝え、二度と悲惨な戦争が起きないように私たちにできることを考え続けていこうと思いました。現在日本は、戦争が終わったにも関わらず、多額の税金を軍事費に費やし沖縄でも辺野古に新たな基地建設を進めています。入学前は税金の使い道などに関心を持っていませんでしたが沖縄に行き、実際に基地やオスプレイを見たことで他人事ではないと感じました。福祉や教育、医療などに使われるべきだと考えました。

戦争は国によって国民全員が巻き込まれるものであり、戦時中は自分の意思を表明することはできない教育であったことを知り、自分の考えや意見を自由に表明することができる今、自分たちは社会の一員であることに責任を持ち、これからの日本の未来・社会を構成するものとして、平和について考え守っていく必要があると決意しました。



沖縄の海を背景に

平和ゼミナール

昨年8月7日～9日、長崎の原水爆禁止2023世界大会へ学生5名・教員1名が参加した。彼女たちは、入学直後の授業で地域の戦争体験者、被爆者から生の声を聴いて、「今、日本は戦争を始めようとしている」という話に衝撃を受ける。『核兵器や平和について学びたい』、『健康の社会的決定要因の第一条件に“平和”があると知り、平和でなければ健康はつくりえない、核の抑止力を超える新しい考えを学びたい』と参加を決意している。



夏休み明け、全校報告会で被爆者の声を、世界から参加した方の考えを伝えている。

田中重光さんの話：「原爆が投下されてからは一瞬の出来事であった。長崎全体は焼ける臭いで一杯になり、街はなくなり死体の山が至る所にあり、トタン板に木片をおいて遺体を焼いた。川にも遺体が浮き、1年で14万人が亡くなった」という。

木戸さんの話：「爆心地から2キロの地点にいた。飛行機の音がして、アメリカの飛行機ようだ…と会話していたら原爆が投下され20メートル飛ばされ、しばらく気を失った。

母に名前を呼ばれ目を覚ますと、母は顔一面に火傷を負い、目が開かなくなっていた。今ではこのときの母の顔を覚えていない。姉は学校の中庭の小屋にいて助かったが他の生徒は亡くなったという。たまたま火傷に効く薬をくれたのは軍の医師だった。医師はケロイドと診断した。



憲法97条をしっかりと頭に入れてほしい、多岐にわたる願い」と話された。

憲法97条：「この憲法が日本国民に保障する基本的な人権は、人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であって、これらの権利は、過去幾多の試練に堪え、現在及び将来の国民に対し、侵すことのできない永久の権利として信託されたものである。」

アメリカから来たマーガレット・エンゲルさんの話：「ニューヨークに帰ってこの大会のことを報告するのが楽しみ。核軍縮・核兵器のことを話すには難しいことが多い。何も知らないということは、これからいくらかでも学べるチャンスがあるということ。独創的に、クリエイティブに考えるべき、機会を駆使して世界に広めるべき。今オッペンハイマーの映画に抗議している。この映画により戦争の儲けを得ようとしていること、軍の活動で地球環境が悪化している」と話していた。

世界大会に参加して「あたしたちにできることを何かしたい」と、平和のための戦争展・流山での報告や、校内にお菓子やカップ麺をセルフ販売コーナー設置、学校祭で世界大会の内容を模造紙展示、第5福竜丸DVD学習会、12月には夢の島へ「第五福竜丸資料館」見学ツアーとニュース発行を行っています。活動の中で9月以降ゼミナールの仲間が6名増えました。

『2017年7月7日、122か国の賛成によって“核兵器禁止条約”がついに国連で採択されました。それは核兵器をつくることも、もつことも、使うことも、それらに協力することも、いかなる場合にも禁止して核兵器廃絶への道筋を定めた、歴史上初めての国際条約です。

核兵器の非人道性が国連で議論されているのと平行して、ピースボート(NGO)は広島・長崎の被爆者の人たちと世界中で証言活動を展開されたそうです。「核兵器の非人道性」という言葉の意味を、一人ひとりの生身の体験の証言というかたちで、世界の人々に語りかけていく活動をおこなったのです。

ノーベル平和賞を受賞したICANには、世界中からさまざまな活動家や専門家が参加しています。

条約というのは国と国の約束事ですから、それを交渉して締結するのは国家です。ICANは国家ではなくNGOですから、条約を直接結ぶことはできません。それでも、国と国の交渉の場に出かけていき、会議を傍聴しながら各国の外交官に働きかけ、直接意見を表明するなどして、条約づくりを後押ししていきました。こうしたとりくみを「市民外交」と呼ぶことができます。

わたしたちひとりひとりが核の非人道性を学び、語り伝える活動が力になる』と教わった川崎哲氏のことばが私たちの活動に確信を与えてくれます。

ゼミの活動をする中で、「事実を知り、あらためて核兵器はこの世界にあってはならないものだと思います。悲惨な歴史を繰り返さないために、次の世代に語り、歴史を学ぶことが大切」と学んでいる学生たちと核廃絶への“市民活動”を取組んでいきます。(生田)



第29回 東葛祭



東葛祭実行委員

2023年9月29日、30日に4年ぶりに一般公開で東葛祭を開催しました。2020年1月に新型コロナウイルス感染症の国内感染が確認されて以降、規模を縮小し学内のみで開催しましたが、今年は、感染が広がらないように意見を出し合い地域の方々をお招きし開催することができました。4月から東葛祭実行委員の会議が始まり、短い期間のなかテーマ決めから始まり、縦割り活動など学年を超えて学生が協力し、本番の日まで昼休みや放課後を使いながら準備に取り組みました。27期、28期、29期はコロナ前の東葛祭を経験していなく、手探りの中どのようにすれば沢山の方に来ていただけるか考え、委員会でポスター作製を行い、学校ホームページや近隣駅、施設などに掲載させていただきました。近隣の方々をはじめ、実習先の方々や卒業生、受験生にも来ていただき、100名以上の方に来場していただくことができました。

今年はコロナ感染により困難となった東葛祭をもう一度新しく創り上げ継いでいくこと。東葛看護専門学校が来年で30周年を迎え、私たちは地域の方々に支えられ日々この流山の地で学ばさせていただいていること。各学年の学びの交流を行っていく事で、30年間育ててきた木

をこれからも成長させていくという意味を含め、木を学びの結晶に例えて育て続ける学びの木と考えました。そこで決まった「あつまれ東葛の森～育て続ける学びの木～」というテーマに沿って1日目は各学年の学びを共有しました。1年生は「No War～ありのままを知り伝え続ける大切さ～」2年生は「イメージ」から高齢者を捉える中で見えてきた基本的人権についての学び」、3年生は「10代で統合失調症を発症し、疾患と向き合い続けながら「就労したい」という目標に向かって頑張るY氏からの学び」を発表し発表後の質疑応答では各学年から様々な意見や感想がだされより学びを深められたと思います。午後には全日本民医連副会長の川上和美様を講師に迎え、「ともに学び考えよう！ジェンダー平等と個人の尊厳」～希望・未来・東葛～というテーマで講演をしていただき、学校全体でジェンダーと個人の尊厳について学びました。無意識に浸透させられている行動規範や価値観によってジェンダー差別が作られていること、そのようなジェンダー問題の中で自分たちが無意識の中で当事者になっているかもしれないということからジェンダー問題は全ての人の人権と尊厳の問題だと学びました。

2日目は一般公開日とし、各学年が力を合わせ縦割り企画を実施しました。今年は昨年も人気のあった“お化け屋敷、食事処、VS パーク、小林さんの写真展”に加え、“看護ブース、縁日、アーチ看板”を設置。また、学内を回りながら楽しんでもらえるよう人探しゲームを追加するとともに、3年生が実習で受け持たせていただいたY氏にも許可を取らせていただき、Y氏のアート作品を飾らせていただきました。企画を通して生徒だけではなく、教職員にも参加していただき学校全体でも盛り上がる事ができました。また、アーチ看板ブースには来ていただいた方々から果物型のカードにメッセージを書いていただき、木に貼っていくといったものを設置し、たくさんのメッセージをいただきました。楽しかったという意見やまた開催してほしいといったメッセージをいただき、その言葉をいただけたことが嬉しく、4年ぶりの東葛祭は大成功をおさめることができました。第29回東葛祭を新たな土台とし、後輩たちにはより良い東葛祭を創り上げていってもらい、学びの木を育てていってほしいと思います。

(東葛祭実行委員長 細野)

第27回 体育祭

2023年7月14日に流山キックマンアリーナにて、「全学年で団結し合い盛り上げよう!!」のテーマで体育祭が行われました。

3年生は実習中で会議に参加できない中でもこまめに1・2年生と連絡を取り合いながら体育祭に向けて準備を進めてきました。当日は実行委員全員で進行から準備・片付けまで協力し期間が短い中体育祭を無事に成功させることができました。

コロナ禍となり、他学年との交流が出来なかった中で、久しぶりに他学年と交流できる貴重な時間となりました。体育祭を盛り上げようとメガホンを作ったり、おそろいのTシャツを着て参加している学生もいて楽しむ様子が見られました。

1年生は初めての体育祭、3年生は最後の体育祭でしたが、どの学年もクラス一丸となり全力で種目に取り組む姿勢が見られました。どの種目

も白熱した戦いが繰り広げられ、特にバレーボールの決勝戦では選手だけでなく応援も含め盛り上がりました。

1年生は優勝、2年生は応援賞、3年生は努力賞という結果でした。

半日で綱引き・バレーボール・借り人競争・リレーの4種目を行い、暑い中でしたが怪我することなく楽しい体育祭となりました。

(27期生実行委員長 五十嵐 早紀)



コロナ禍でも「私たちは患者さんの人権を護れる看護師になりたい」と決意する看護学生

副校長 山田かおる

1. はじめに

本校は、「日本国憲法」と「(旧) 教育基本法」を教育理念に据え、「学生が学ぶ主人公」という学生の学ぶ権利を保障し、人権や命の尊厳を護り、平和で豊かな社会建設の形成者として成長できる看護教育を目指してきました。開校から 29 年、世界的パンデミックのなかで挑んだコロナ禍での教育を振り返りたいと思います。

2. コロナ禍の看護教育

2019 年度 3 月に予定していた補習実習そして補習講義は、「全国一斉休校」という結末で奪われていきました。賑やかだった学校は、学生のいない空虚な建物と化しました。この事態をどう理解し、どう対処したらよいのか職員会議で議論する毎日でした。郵送で始めた教育活動。学生から送られてきた課題レポートには「早く学校に行きたいです」と小さな付箋が張られていました。5 月 21 日初めての zoom によるオンライン HR は、うまく接続できるのか、声が聞こえるのか、顔が見えるのかドキドキの時間でしたが、学生たちはクラスメートとの再会を喜び、画面越しに全学生たちの笑顔に会えました。

3. 千葉県で一番初めに臨地実習を開始できた東葛看護学校

千葉県内で最初に臨地実習を開始したのは東葛看護学校でした。設立法人の病院は「可能な限り早く臨地実習を開始する」と決断してくださり、臨地実習を 2020 年 6 月末に再開することが出来ました。再開にあたっては、こちらも千葉県内の看護学生で最も早く新型コロナワクチンを接種することができ、感染対策をして病院での臨地実習を開始することが出来ました。

4. 2024 年度 27 期生総合実習 学生個人論文より

受け持ち初日の光景を看護学生は「衝撃と恐怖を感じているだけでも辛くなった。」と語っている。腰椎圧迫骨折の保存療法のために使用していた硬性コルセットを看護師が装着しようすると、A 氏は「やめろ!! ぶん殴るぞ!!」と怒鳴り、強い力で装着に抵抗をする。離床も食事も強い口調で拒む。同日より鎮痛剤を定期処方に変更し少しずつ痛みが和らいでいった。痛みのコントロールが出来れば ADL の向上に向けた働きかけが出来ることに確信をもっていく。また、窓際で景色をずっと眺めながら笑顔になる様子から、自然への関心が高いと掴んでいく。趣味だった登山の写真を持参してみると、すぐに手に取って懐かしむように何度も写真を見ている。写真を見ながら「山を通して人と交わる」と話し、人々との交流を大切に生きてこられた A さんの健康さに気づいていった。実習最終日には、「つなぎ」は、現状では必要はないと判断しセパレート式の病衣自ら車椅子を漕いでデイルームへ行く。「くるみ割り人形を聞きたい」という A さんのために準備した CD を流す。A さんは足を組んで外を眺めながら音楽を聴いていた。その様子を学生は「家でもこんな風にリラックスされていたのかな」と記述している。40 年間英語教諭で洋楽が好き、山と読書が人生の一部。そんな A さんの本来の姿が想像できる、絵画のような一場面であった。

5. まとめ

“コロナ禍でテレビで見て、私も医療現場で奮闘する看護師になって誰かのために力を尽くす人生を歩みたい。”と決意して入学してきた学生たちが、いよいよ巣立ちの時を迎えた。オンライン授業、実習時間短縮、行事縮小の 3 年間であったが、看護学生たちは患者さんに学び、優しくそして逞しく成長していく。患者さんの人権を護りたいと決意した看護学生たちに、看護の未来を託していきたいとまた今年も思う。

26期自治会活動紹介

私たち東葛看護専門学校学生自治会は勤医会東葛看護専門学校の学生として「患者さんの立場に立つ看護」を学ぶという本来の目的を達成するために、全学生加入の元で一人ひとりが学習しやすく、学生が主体となって活躍できるような環境を作れるように活動しています。役員の構成は二年会長・副会長・会計・会計監査・書記一人ずつ、一年副会長・会計・会計監査一人ずつ、書記二人の計10名で10月に選挙にて任命され活動を開始しました。

26期自治会が行った主な取り組みは、高等教育無償化を求める署名の訴えを学内で行いました。そのことで貧困している学生の多さに気づき学内で全国看護学生アンケートを行った調査結果からも学費が経済的負担となり圧迫されている学生の存在を知りました。このことから署名活動やアンケートだけでなく学生の生の声・切実な訴えをビデオに国へ直接届ける取り組みを行いました。届けるにあたり生の声を届けるという機会をいただいたことでクラスの方

ら話を聞きとりました。また学内で行ったアルバイト調査結果からも学生の厳しい生活実態を知ることができました。ある一人暮らしの学生はアルバイトを掛け持ちして生活しています。2つの奨学金を借りて学費と生活費の足しにして生活し学んでいます。奨学金を借りているため毎日の授業をしっかりと受けたいと思いながらもアルバイトを夜遅くまでしているために日々の授業への悪影響が出ています。また、子育てをしながら学校に通い、生活のためにアルバイトをしている学生がいます。育児と学業、アルバイトの両立は難しく、実習は家から遠い場所になることも多くその交通費もかなり家計への負担となっています。光熱費やガソリンなども高騰化しているためアルバイトを増やしていかなければいけないがなかなか生活の比率が合わず苦しいと言っていました。一人親の学生は同居する兄弟も多く親族からの経済的な支援がなく、学校や生活のお金はすべて自分から捻出しないといけず不安を

かかえて生活しています。実習中にもアルバイトをしないと生活ができない状況にあります。3年生になるとより多忙になり、アルバイトと学業を両立できるか、将来への不安を抱え学業に専念できないという声が上がりました。アルバイト調査結果では、多くの学生が経済的に困難な状況にあり、安心して学生生活を送ることができていないという状況が分かりました。これからの未来を背負う学生が安心し、お金に心配なく学業に専念でき看護師を目指すための学びが保障されるよう訴えていきたいです。



26期自治会一同

新任のご挨拶



井藤 三和

2023年9月から東葛看護専門学校に赴任しました3期生の井藤三和です。

これまでは城南福祉医療協会大田病院、健友会中野協立診療所で看護師として働いてきました。東葛看護学校で深く学んだ“生活と労働の視点から患者様を捉える視点”は、私の看護の中心をしっかりと貫き、看護の原点となっています。

そして今、教員一年生となり、改めて自分の看護観を学生達の学びと共に振り返り、自分の未熟さと出会う日々。わからないことだらけで落ち込むことも多くありますが、学生達がそれぞれの悩みを抱えながらも、元気に立ち向かう姿や大事な学びに到達したときの笑顔に励まされています。学生達一人一人のキラリと光る感性に触れられる瞬間は本当に感動的です。「先生、元気ないけど大丈夫？」の一言にホロリ。これからも学生達に支えてもらいながら、学生のとなりに並んで一緒に考えていける教員であるように、教員として医療者として成長し続けていきたいと思っています。



左部 祥子

2023年5月から着任しました左部祥子と申します。1科3期生の卒業生です。卒業後は船橋二和病院、民間病院、東葛病院に勤務してきました。病院勤務時は、たくさんの患者さんやスタッフとの出会いがありどんな看護がしたいかを常に考えてきました。

着任当初は、緊張していましたが、自分の学生時代と変わらない学校の雰囲気にもっとしました。

学生の実習に同行し、患者さんの願い・生活背景などを捉え、病態学習を共に行い、看護とは何かを考えてきました。患者さんと話すことは楽しく、願いや生活背景を捉えることの大切さを実感しています。病態学習では、これまでの学習不足を痛感しながらも分かったときの喜びを感じています。また、自分がこれまで行ってきた看護について振り返り、改めて看護について考えさせられる毎日を送っています。

悩むこともありますが、学生達の患者さんを捉える純粋さに心が洗われ、元気あふれる学生達からパワーをもらっています。

2024年度は教員養成研修へ参加し、多くのことを学び、戻ってまいります。

分からないこともたくさんありますが、今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

新任のご挨拶



庄司 希美

2023年5月に着任しました庄司希美です。私は2004年3月に当校の1科7期生として卒業しました。春には江戸川沿いに菜の花が一面に広がるこの学校が大好きです。

臨床で20年ほど働き、この学校に学生ではなく職員として戻ってくるとは思っていませんでしたが、今は毎日キラキラした学生たちにパワーをもらいながら、楽しく学校に来ています。至らないことも多いですが、学生たちとともに医療現場の厳しさ、社会情勢を知りながら人間性豊かな看護師になれるよう、一緒に学び成長できたらいいなと思っています。

ようこそ先輩



私は18期生として卒業し、現在代々木病院の回復期リハビリテーション病棟で働いております。病棟内は東葛出身者も多く、スタッフ同士和気あいあいと日々仕事をしています。回復期リハビリテーション病棟は主に脳血管疾患、骨折後のリハビリテーション目的の患者さんが入院されています。

超高齢化社会に伴い高次脳機能障害や認知症の方も多くいる中で患者さんたちが安全に快く入院生活を送れるのか多職種カンファレンスも行いつつ病棟全体でリハビリに臨んでいます。

脳梗塞で入院中のある患者さんは入院当初、声掛

けに開眼もせず吸引時に嫌がる仕草をしていました。そのためスタッフ皆で声掛けやリハビリを応援、4ヶ月経った今は声掛けをしなくても開眼をし、ベッド端坐位になった際にスタッフの顔を見て嘔き出して笑うなど表情も豊かになっています。日々の関りが患者さんの変化につながり、「ありがとう」という患者さんからの言葉を糧に仕事を続けております。

私は今年10年目となりますが、患者さんの思いに寄り添い看護していけるように日々精進していきたいと思っています。東葛地区からは離れておりますが機会があれば是非代々木病院にも足を運んでください。

(1科 18期生 小野明日香)

編集後記

ロシアによるウクライナへの侵攻が3年目に突入している。最近ではイスラエルがガザ地区を攻撃し凄惨極まる軍事攻撃で多くの命が奪われ平和と人権保障の危機になっている。

研修旅行で出会った沖縄のB氏は「物心ついたときすでに日本は戦争状態で、戦災孤児や貧困、労働環境など戦争による影響が社会全体に広がっていった」と実相を話してくれた。2度にわたる世界大戦の教訓から戦争を起こさないと決めた国連憲章を踏みにじっている社会の現実をどう考えていくか。また過去の戦争さなかにスペイン風邪が流行し、5億人が死亡したのも驚く事実である。今の新型コロナウィルスと同様肺を強襲するウィ

ルスであるが、低所得者や貧困層など差別を受けていた脆弱な人々に広がっていった。今でも日本社会は6~7人に一人が貧困であると言われているがコロナ禍はさらに貧困に拍車をかけ一方で日本の防衛費は上昇し続けた。2021年核兵器禁止条約の発効は核兵器が国際法により憲法化、違法化されたが唯一の戦争被爆国である日本は参加を見送っている。そして人権問題も後退させている。医療や介護、福祉は命の根幹、自己責任ではなく平和と人権、個人の尊厳、ジェンダー平等など多様性が尊重される社会を目指すために学び続ける学校でありたい。

(教員 高田澄子)

キラリ 学ぶ青春



入学式 早速インスタ交換



ユニフォームもいいけど
田植え姿も似合う



2023年4月
～2024年2月
小林 功
モノクロ写真館



全日本民医連
川上氏
ジェンダー平等

東葛祭



借り人競争“みつけた”



初めて開催されたホームカミングディ



誰もが人間らしく最期を迎え
られる場所が見つかりました

楽しい交流 オープンキャンパス



勤医会東葛看護専門学校

編集・発行 勤医会東葛看護専門学校
〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409 TEL.04-7158-9955 FAX.04-7159-7055
発行責任者 校長 窪倉 みさ江